# 学 術 調 査 報 告 書

2008 年 3 月 24 日

| （フリガナ） | ﾑﾗﾀ　ﾊﾙｾ | 入学年度 | 2004 年度 |
|---|---|---|---|
| 申請者名 | 村田　はるせ | 学年 | 3 年 |

| | |
|---|---|
| 研究題目 | アフリカ文学の歴史と現状<br>－文学に表象される社会・文化的現実－ |
| 主任指導教員 | 西谷　修 |

(1) 学術調査の目的

①ブルキナファソ文学の展開、文学執筆と社会・文化状況の関係、作家の意識の変遷を研究するための資料を収集し、聞き取りも行う。

②ブルキナファソ文学の出版状況と国内での受容の状況を調査する。

③ブルキナファソ小説の読解を深めるため、ブルキナファソの文化への知識を得る。

(2) 調査実施地および期間

2008 年 2 月 22 日～26 日、3 月 11 日：フランス( France )

2 月 26 日～3 月 10 日：ブルキナファソ( Burkina Faso )

(3) 学術調査の具体的な実施内容

□フランス国立図書館、パリ書店( L'Harmattan 等 )でブルキナファソの文学、教育に関する資料の閲覧、収集。ブルキナファソ大使館（パリ）でブルキナファソの出版、教育に関する調査のための情報を収集。

□ワガドゥグの書店訪問：①L'Harmattan のブルキナファソ支店長エルマン・ソメ( Hermann Y. SOME )氏へのインタヴュー。同書店からの出版原稿の選考方法、文学作品の主題の傾向等について。②DIACFA のベルナール・チョゴ( Bernard TIOGO )氏への質問。文学作品の販売状況、人気作品について。③路上書店訪問。

□ブルキナ出版社協会( Association des éditeurs du Burkina：ASSEDIF )代表で作家のアンソムウィン・イニャス・イエン( Ansomwin Ignace HIEN )氏へのインタヴュー。ブルキ

ナファソの出版状況、問題点、氏の執筆活動、主題について。

□ワガドゥグ国際書籍市( Foire Internationale du livre de Ouagadougou )関係者へのインタヴュー：国立図書館館長ブカレ・ジャロ( Boukaré Diallo )氏／文化・観光・コミュニケーション省、書籍・読書局局長（Directeur de la Direction du livre et de la lecture, Ministère de la Culture, du Tourisme et de la Communication：この名称は 2007 年以降））ママドゥー・カランタオ( Mamadou KARANTAO )氏、／フランコフォンのための国家委員会事務総長( Secrétaire Général de la Commission Nationale pour la Francophone )ドラマヌ・コナテ( Dramane KONATE )氏。FILO の目的、実施状況、問題点、ブルキナファソの出版状況について。

□基礎教育・識字省( Ministère de l'Enseignement de Base et de l'Alphabétisation )でのアダマ・タンブラ(Adama TAMBOURA )氏へのインタヴュー。就学率向上のために乗り越えるべき課題、就学者の社会的な困難について。中高等教育・科学研究省( Ministère des Enseignements secondaire, supérieur et de la Recherche Scientifique )での就学に関する資料の収集。

□リセ( Lycée )（前期・後期中等教育施設。日本の中学校・高校に相当）での文学の授業見学：南西地域圏イオバ地方ディシン県ディシン( Région： Sud-Ouest, Province： Ioba, Département：Dissin, Dissin )のリセ、第二学級( la deuxième classe )にて。

**(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など**

**Ⅰ．ブルキナファソの概要と同国でのフランス語で書かれた文学の歴史**

調査結果を報告するにあたって、ブルキナファソの概要とブルキナファソのフランス語で書かれた文学の歴史について簡単に述べたい。

**１）ブルキナファソの概要**

ブルキナファソ( Burkina Faso )は西アフリカの内陸の国で、首都はワガドゥグ( Ouagadougou )。公用語はフランス語である。国土は熱帯草原サバンナに位置し、気候は乾季（９～４月）と雨季（５～８月）からなる。2006 年の同国の人口は 13 730 258 人である[1]。国内には 60 以上の民族が暮らしているとされる。もっとも多いのはモシ( Mossi )

[1] 基礎教育・識字省の 2006-2007 年度基礎教育調査一覧( Tableau de bord de l'éducation de base, année scolaire 2006-2007 )より。

の人々で、人口の約 48%を占めている[2]。国民一人当たりの GNI は 460 米ドル（2006 年世銀）[3]で、世界最貧国の一つである。

学校の教育言語は主にフランス語である。就学率と識字率の低さは同国を悩ませてきた大きな問題で、2006-2007 年度の CP1（日本の小学校一年生に相当）への就学率は 66.6%である。前期中等課程( 1er Cycle )すなわち第六学級（ Sixième )への就学率が 22.9%、後期中等課程( 2nd Cycle )すなわち第二学級（ Seconde ）への就学率が 9.3%である。同年度に大学生（1 年生から博士課程まで）が全人口に占めた割合は 2.5%である。15 歳以上の国民の識字率は 2006 年に 28.3%だったが、世界の最低水準である[4]。

この地域は 19 世紀末にフランスの侵攻を受け、1904 年にフランス領オー・セネガル・ニジェール植民地の一部に組み込まれ、1919 年にはフランス領西アフリアを構成する植民地の一つオートボルタとなった。同地は地下資源に乏しく、1932 年には他の植民地への労働力供給地として、隣接するマリ、ニジェール、コートディヴォワールの各植民地に分割された。その後 1947 年にオートボルタとして再構成された。独立は 1960 年である。だが 1966 年、1980 年、1982 年、1983 年とクーデターが勃発、政権が目まぐるしく交代してきた。1983 年のクーデターの中心人物トーマス・サンカラ( Thomas SANKARA )は政権を掌握すると、1984 年に当地の言語で「高潔な人々の国」を意味するブルキナファソと国名を改めた。彼は教育、女性の地位向上、住宅状況の改善等の分野で急進的な社会改革を進めた。しかし 1987 年に現在の大統領ブレーズ・コンパオレ( Blaise Compaoré )が軍事クーデターを起こし、暗殺された。

---

[2] Les éditions J. A.. 2001. *Africa Atlases, Burkina Faso*, Paris：Editions du Jaguar, p. 39 参照。

[3] 外務省各国・地域情勢( http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/burkina/data.html )より。

[4] 以上の就学率と識字率は註 1 の資料と中高等教育・科学研究省の資料を参照した。

[5] SANOU, Salaka. 2000. *La littérature burkinabé：L'histoire, les hommes, les oeuvres*, Limoges：PULIM.

[6] BONI, Nazi. 1962. *Crépuscule des temps anciens*, Paris：Présence africaine.

[7] 作品は以下である。HIEN, Ansomwin Ignace. 2006. *Les colombes de la paix*, Ouagadougou：Découverte du Burkina.

[8] KABORE, Armand Joseph. 2007, *L'édition du livre au Burkina Faso*, Paris：L'Harmattan.

[9] de KOMESTAN, Chanel. 2005. « L'Ascenseur », in *Avance mon peuple*, Ouagadougou：Découverte du Burkina, pp. 131-148.

[10] ILBOUDO, Monique. 2006. *Droit de cite：Etre femme au Burkina Faso*, Monréal：Editions du remue-mènage.

２）ブルキナファソの文学

アフリカの多くの地域では、集団の記憶や出来事、知恵を伝達するために口承が大きな役割を果たしてきた。その後アフリカがヨーロッパ諸国によって植民地化され、現地での支配を補助する人員を養成するために学校制度が導入されると、就学経験者たちが宗主国の言語を使って、黒人としての自己を表現するために文学作品を書き始めた。アフリカのフランス語で書かれた文学の起源は 1930 年代に誕生したネグリチュード運動に溯る。第二次世界大戦後には自治や独立を求めて西アフリカでも政治運動が盛り上がるなか、知識人たちは小説表現によって植民地での自己形成、アフリカ社会の変化、政治参加を書いた。この時代に発表された小説の中には、現在でも学校教材として読み継がれているものがある。だが国立のワガドゥグ大学で文学を教えるサラカ・サヌー( Salaka SANOU )は自著『ブルキナファソ文学　―歴史、全作家、全作品―』[5]で、ブルキナファソの文学は、政治家でもあったナズィ・ボニがようやく 1962 年に『古の時代の黄昏』[6]を出版した後は、1980 年代まではほとんど作品が出版されなかったと述べている。サヌーは、それはまず植民地期にオートボルタ（現ブルキナファソ）が分割されたため、この地域での学校教育の水準が周囲に比べて低く、就学者たちはたとえばセネガルの知識人のようにフランス留学によって他地域の黒人知識人やヨーロッパ知識人と出会い、黒人としての自己に目覚めて執筆を始めるという契機に恵まれなかったためだと述べる。次に第二次世界大戦後には、オートボルタを再構成するために知識人たちが奔走したため、文学創作の停滞を招いたという。しかし独立後に作家たちが結束して作品発表の場を模索したにもかかわらず、文学作品の出版は困難だった。転機が訪れたのはサンカラが政権を掌握した 1983 年以降である。革命体制を敷いた政府は、政策の一つとして文化推進を発表し、国民教育・芸術・文化省に文化事業総合局を創設した。そして国民文化週間( Semaine Nationale de la Culture：SNC )が組織され、コンクールで選ばれた芸術作品に対して国民芸術・文芸大賞( Grand Prix National des Arts et des Lettres：GPNAL )が授与されることになった。文学では詩、小説、短編、演劇、物語( contes )の各部門の、大賞から３位までの作品は政府による出版が約束された。この企画は出版の機会を得られなかった作家たちを大いに勇気づけ、創作意欲をかき立てた。サンカラは暗殺されたが、国民文化週間の精神は引き継がれ、今日でも国民文化週間( SNC )開催と国民芸術・文芸大賞( GPNAL )授与は 2 年ごとに行われている。

今回私は以上のような状況を鑑み、今日の作家たちの扱う主題と社会・文化の関係、作

品の受容、出版状況、読書や本の普及に関する問題について調査を行った。

## Ⅱ．現在のブルキナファソ文学の状況、直面している困難

サラカ・サヌーはブルキナファソ文学の第一人者で、存命中の主要な作家たちほぼ全員から聞き取りを行った。彼によるとブルキナファソの文学創作は社会情勢や、そこに生きる人間の営みと深い関わりをもっているという。そして作家たちは社会の出来事を言葉にし、それによって他の人々の意識に働きかける責任があるという強い自覚をもっているとサラカはみている。確かにブルキナファソ作家たちの作品は、ブルキナファソの政治的・社会的・文化的状況を色濃く反映し、そこに生きる人々がどのような意識をもち、どのように現実を捉え、何に苦悩しているかを描いている。では現代ブルキナファソ文学は何を主題にし、どのような作家によって書かれているのだろうか。また本一般が置かれた状況とはどのようなものなのだろうか。

### １）文学作品の主題と作家たちの社会的地位、読者による受容：書店訪問

書店での聞き取りからは、ブルキナファソ文学の主題、作家たちの社会的地位、読者の求める本について知ることができた。だがこの国では識字率の低さとともに貧困のため、本を手にする人は限られている。たとえば庶民は日常的に屋台で食事をとるが、白米にトマト味のソースという食事１回が 200～300CFA、マッチ１箱 25CFA、オレンジ１個 50CFA、タクシーでの３キロほどの移動までが 200CFA であるのに対して、本の価格は新品で 5000～10000CFA 以上、古本でも 2500～3000CFA である。（650CFA≒１ユーロ。）中・高等教育を受ける者には本は不可欠だが、多くの国民にとって本はぜいたく品なのである。

ところでこの国には２種類の書店が存在する。まずは日本にもある固定の書店がある。ここは新品の本だけを扱い、価格も固定である。次に「路上書店( librairie par-terre )」と呼ばれ、トタン板で囲んだ小屋のような書店がある。ここでは主に古本を扱い、値段交渉ができる。路上書店は学校や大学の周辺に集中し、学生たちは路上書店で古本を買い、生活費が必要になると手放すのである。けれどもどちらのタイプの書店も首都のワガドゥグと、せいぜい第二の都市ボボ・ジュラソにしかなく、他地域に書店はない。

#### ①ラルマッタン　ブルキナファソ支店訪問（写真１枚目：土壁の L'Harmattan の写真）

パリのアジア、アフリカ、ラテンアメリカの専門書店ラルマタッタン( L'Harmattan )のブルキナファソ支店は固定の書店である。ここではブルキナファソ在住の作家たちの原稿

を、審査のうえでフランスのラルマッタンから出版する事業も行っている。店長エルマン・ソメ氏によると、毎週 4 本程の原稿が持ち込まれ、分野は文学、社会科学や哲学など多様である。原稿はワガドゥグ大学の教員や、当該分野の知識をもつ学生に査読してもらい、年間 40～50 本を出版に回している。不採用の原稿はコメントをつけて返却する。2006 年に出版したのは約 50 冊で、このうち 10 冊の学術書以外はすべて文学作品だった。

ソメ氏によると文学作品の主題として多いのは、社会問題とりわけ生活上の困難とそれを原因とする非行や犯罪、社会変革を目指した政治参加、異なる文化的背景をもつ人間同士の出会いと葛藤だという。60 以上の民族が暮らしているブルキナファソでは、文化や習慣の違いによって生じる混乱や対立が文学の主題になっているのである。ソメ氏は、作家たちは主に自分の生きる社会での自分自身の問題からインスピレーションを受けて書いていると強調していた。また読者もそうした作品を好むようだという。また最近では、植民地期以来大量のブルキナファソ人を労働力として受け入れてきた隣国コートディヴォワールの危機が作品の主題として表れてきているそうだ。コートディヴォワールでは 1990 年代末から、外国人とりわけブルキナファソ人排斥が政治的に煽られ、2002 年にはこうした情勢への抵抗としてクーデターが起こり、国家が二分された。ブルキナファソ小説や短編では、主人公が社会的困難に直面した場合の逃亡先の一つとしてしばしばコートディヴォワールの大都市アビジャンが登場する。ブルキナファソに限らずアフリカの文学からはこのように、ある社会のある時代の人々が自分を取り囲む世界をどのように捉え、判断し、行動してきたかを読み取ることができる。今日作家たちは、コートディヴォワール情勢の変化にも敏感に反応し、作品を生み出しているのである。ソメ氏は言及しなかったが、後述の作家イニャス・イエンも児童文学のなかでコートディヴォワール危機を取り上げた。それは実話に基づく物語で、コートディヴォワールのある村で、ブルキナファソ人への排斥の雰囲気が高まったとき、コートディヴォワール人とブルキナファソ人の小学生が協力して大人たちに訴え、暴力を止めるのである[7]。

ソメ氏によると文学作品の作家は、少なくとも BEPC( brevet d'étude du premer cycle：前期中等教育修了証書)は取得していて、多くは大学卒業者である。必ずしも文学専攻ではなく、社会階層は大学教員や技術者から高校生、失業者まで幅広い。

原稿が頻繁に持ち込まれる事実や主題、作家の学歴をみると、書くことによって日常的に直面している困難を表現したいという欲求をもつ高学歴保持者が多くいることがわか

る。それはまた経済的な豊かさや、職業上の満足を容易に得ることができない人々の苦悩の反映だと思われる。さらに後述するように、学歴を得ることによって社会の中で経験する葛藤も執筆の動機となっていると思われる。

②ジャクファ

ワガドゥグで最も大きな固定の書店は中心地の市場付近にあるジャクファ( Diacfa )である。ジャクファに並ぶ本のうち書棚の大きな部分を占めているのは、フランスで出版されたフランス人の著者による多様なジャンルの本、教科書、漫画などで、ブルキナファソで出版された本やアフリカの作家の本は店の片隅に並べられている程度である。ジャクファのベルナール・チョゴ氏によると、ブルキナファソ文学作品が店の売り上げに占める割合は平均２パーセントだという。またブルキナファソ人作家はさまざまなジャンルを総合すると 345 人以上存在し、その著作は 600 程にのぼるという。ジャクファはそのうち 100 程を取り扱っている。本は作家自身が店に持ち込み、売れた時点で支払いをする場合と、出版社から仕入れる場合があるという。ブルキナファソ作家の本のなかでもっともよく売れているのは以下のものである。

①BONI, Nazi. *Crépuscule des temps anciens*, Présence Africaine.

②SOME, Jean-Baptiste, *Le miel amer*, GTI.

③KI-ZERBO, Joseph. *A quand l'Afrique*, Editions de l'aube.

④KI-ZERBO, Joseph. *Histoire générale de l'Afrique*, Hatier.

⑤ZONGO, Norbert. *Le Parachutage*, L'Harmattan.

⑥HIEN, Ansomwin Ignace. *Larme de tendresse*, GTI.

⑦KYELEM, Mathias. *L'épine de la rose*, GTI.

①は上述のブルキナファソ作家第一号ナズィ・ボニの小説で、ボニの出身地の文化やそこでフランスからの植民地化に抵抗した人々が描かれている。これはリセの教材にもなっている。②は夫婦の絆を描いた小説で、これもよく知られた作品である。③④はブルキナファソを代表する歴史家で近頃亡くなったキ・ゼルボの著作である。⑤は政府の言論弾圧を批判し、1998 年に暗殺されたジャーナリストのノルベール・ゾンゴの小説作品である。ゾンゴ暗殺の真相はいまだに解明されていない。⑥は上述したイエンの小説作品で、ブルキナファソ女性の困難を主題としている。この国では女性の地位が低く、それが女性への暴力や権利侵害を引き起こしているのである。ブルキナファソ作家の本を読む人々はアフリ

カ、とりわけブルキナファソの過去や国内の問題に関心が高いことがわかる。

**③路上書店**（写真２枚目：トタンでできた路上書店と店主の写真）

路上書店の実態は、すでに『ブルキナファソの出版』[8]という本で紹介されている。それにあるように路上書店の店主たちは高学歴ではなく、生活の糧を得るためにのみこの仕事を選んだ人たちである。彼らは文字は読めるが、本の内容までは把握していない。しかし買い手のニーズには敏感で、セネガルのセンベーヌ・ウスマン( Sembène Ousmane )、マリアマ・バー( Mariama Bâ )、コートディヴォワールのアマドゥー・クルマ( Amadou Kourouma )等、リセや大学で扱うアフリカ作家の作品は必ず揃えている。そのうえ路上書店には固定の書店とは比べものにならないほど多くの本が蓄えられている。とりわけブルキナファソで出版され、年月のたった本は、路上書店でしか探し出せないことだろう。しかしどの本も多くの学生の手を経てきため、ボロボロに擦り切れている。

ワガドゥグ滞在中に「書店に行く」と言うと、作家、省庁の官僚、大学関係者以外の人々からは、「何をしにいくのか？」、「なぜ本のために高い金を払うのか？」と訝られた。本を買う行為は特別なことであるうえ、固定の書店の本は高価なので、路上書店で値段交渉をして買うのが一般的なのである。

路上書店が成立しているのは、就学者には本が不可欠だからである。そしてブルキナファソに限らずアフリカでは就学と学位取得はよりよい職を得るための最低限の条件である。これは植民地期以来の人々の就学の主要な動機である。アフリカでは植民地期以来の学校教育が読書をする人間を生み出し、読書は就学経験者の世界観や認識を変え、彼らの意見や知識の伝達を可能にしてきた。しかしいっぽうでブルキナファソでは識字率が示すように、多くの国民は本とは無縁である。そのため後述するように就学者と非就学者の間の価値観やものの見方には溝ができ、教育行政の課題になっている。また識字率の低さと、本の出版の難しさはこの国では、国民の知識や情報量が制限され、教育への関心を向上させられないという悪循環を引き起こしている。政府はすでに本の出版を推進し、国民の教育への意識を変革するため、ワガドゥグ国際書籍市の開催というような努力も行ってきた。

**２）出版と本の普及のための努力**

国立図書館長のブカリ・ジャロ氏、作家のイニャス・イエン氏、文化・観光・コミュニ

ケーション省、書籍・読書局局長ママドゥー・カランタオ氏らへのインタヴューでは、ブルキナファソの出版の困難、それを解消するための努力を知ることができた。

①出版の困難と現状

国立図書館長のブカレ・ジャロ氏によると、1983 年に国民芸術・文芸大賞( GPNAL )が創設され、受賞文学作品を国家が出版するまでは、国内には出版社が一つもなかったという。作家たちは国外に原稿を送り、出版していたのである。しかし現在では 2008 年時点で 16 の国内出版社をまとめているブルキナファソ出版社協会( ASSEDIF )が誕生している。ただし上述の作家で同協会代表のイニャス・イエン氏は、これらの出版社のなかにはもう活動していないものがあるうえ、なかには作家が自著を出版するためだけに立ち上げた出版社もあるという。1952 年生まれのイエン氏は 1980 年代から小説、短編、物語集、詩集、児童文学を発表してきたが、自著をみずから編集し、国内出版社から出していると語った。

氏によるとブルキナファソの出版の課題の一つは、作家と編集者が出版と単なる印刷の違いを認識していないことだという。というのも作家たちはこれまで、国内に出版社がないため、しばしば自己資金で印刷所から原稿を出版してきたからである。しかし印刷所では校正や割付けはしてくれず、結果として読みづらく、誤字の多い本が出来上がってしまうのである。そのうえ印刷所は ISBN（国際標準図書コード）を本に付すことがないので、その本は国外への流通に不向きである。

けれどもブルキナファソに限らずアフリカのどの国の出版社も抱えている最大の困難は、出版の主な仕事がヨーロッパの出版社によって担われていることである。アフリカでもっとも需要がある書物は教科書だが、大量の教科書をコストを抑えて出版、流通させる能力を持つ出版社はどの国にもなく、ブルキナファソのようなフランス語圏の国はフランスの大手出版社に注文することになる。そのため国内の出版社の発展の機会がますます奪われてしまうのである。海外の出版社は国内の出版社と提携して事業をしてほしい、そのために政府が働きかけをするべきだ、というのが協会の要求だとイエン氏は語った。

イエン氏は作家としての活動をしながら、ブルキナファソの出版の促進にも力を注ぎ、以下で触れるワガドゥグ国際書籍市( FILO )の運営にも関わっている。アフリカの作家はアフリカの状況を変えるために積極的に行動するが、イエン氏もそうした作家の一人である。

ブルキナファソ国内で出版された本を国家として保存していく策も取られるようになった。上述の国立図書館長ジャロ氏は、1998 年以降ブルキナファソで出版された本は国立図

書館への４部の納本が義務付けられたと教えてくれた。またフランスなど海外で出版された本も作家自身が納本することがあり、その場合には２部が収められるという。

2006 年に納本された文学作品は、以下の通りである。

小説 10 作品（内３作品はフランスで出版）／詩集３作品（内１作品はマリ、１作品はフランスで出版）／児童文学２作品／物語１作品　　合計 16 作品

2007 年に納本された文学作品。

小説３作品／短編集２作品／詩集１作品／児童文学１作品／物語２作品／演劇１作品　合計 10 作品

**②ワガドゥグ国際書籍市( FILO )**

2000 年以降ワガドゥグで毎年開催されてきた書籍市 FILO は、国内の出版を促進し、出版関係者同士の交流と意見交換の場、一般市民の本との出会いの場を設けることを目的としている。1 週間の開催期間には、国内の作家や教育関係者の講義、子ども向けのお話の会、作家志望者のための執筆講座、国内の書店、出版社が設けたブースでの本の展示・販売がある他、アフリカの周辺国、欧米、アジアからも作家や出版関係者が招かれ、交流が行われる。2006 年からは子どもコーナー( Espace Enfant )設けられ、児童文学や識字用のゲームにふれることができる。また開催中は首都ワガドゥグと近郊 25 キロの公立小学校へは、バスが児童たちを迎えに行き、参加を促すという。ただしこうした試みも首都近郊の人々にしか影響を与えられないという問題点が残っている。

**３）教育の課題**

文学作品を含めて本は就学者だけに関わるものであることがわかった。文学創作はこの状況とどのようにかかわり、何を表現しているのだろうか。

ブルキナファソは就学率と識字率の向上に努めてきたのだが、基礎教育・識字省のアダマ・タンブラ氏によると、ブルキナファソで就学を妨げているのは、すべての子どもが通えるだけの学校を建設する予算が国家にないという事実である。さらには北部の遊牧民が多い地域では、子どもを就学させる意義を親が理解できず、むしろ家業を手伝わせることを優先させているという問題があるという。

さらに氏は、就学者は学校を卒業しても出自社会に溶け込むことができないという大きな問題を抱え込むと語った。つまり学校では、生徒の親の仕事とは無関係な内容を学習す

るので、卒業しても農業や牧畜など親の仕事を引き継いで生きることができないというのである。また氏自身の経験では、就学経験者はフランス語の習得や西洋の知識や価値観の獲得によって、就学経験のない人々との間に越えがたい溝があることを感じるという。彼らは出自社会で疎外感を味わうというわけである。そのうえ彼らは成功者とみなされ、就学する弟妹たちを経済的に世話することを期待される。タンブラ氏のような就学経験者の立場を語っているのがシャネル・ドゥ・コメスタンという作家の短編「エレベーター」[9]である。このなかで就学経験者の主人公は、困窮のために幼なじみの友人を病気から救うことができず、期待を裏切ったという自責の念に苛まれている。このため彼は故郷にも帰りづらくなり、友人は亡くなってしまう。学校を出ても必ずしも豊かになれるわけではない。かといって故郷の農村の人々と同じ価値観で生きているわけでもない。そのことを幼なじみに語っても理解してもらえたかどうかと考えながら、主人公は文字が読めなかった友人に宛てて、長い手紙を心のなかで書くのである。タンブラ氏の経験は就学率や識字率という数字からは読み取ることができない。アフリカの文学はそうした苦悩を表現してきた。

またどうじに女子の就学率の低さも大きな課題である。この国では教育のレベルが上がるほどに女子の就学率が下がるのだが、フランコフォンのための国家委員会事務総長ドラマヌ・コナテ氏は、「いつかは結婚して他人の子どもを生む娘のために就学の費用を賄うなど無駄なことだ」という意識がいまだにブルキナファソ男性には強く、それが女子の就学の妨げになっていると語った。そのうえこの国では、父親が決めた相手と娘を結婚させる強制婚( mariage forcé )という慣習があり、とりわけ農村部では女性自身が進路を決定することが難しい。これについてはブルキナファソ女性小説家第一号であり、法学博士、フェミニストでもあるモニク・イルブドがブルキナファソの女性の権利を憲法や法律に照らして解説した著書『市民権　―ブルキナファソで女性であるということ』[10]のなかで、この慣習が女性の権利を侵害すると非難している。イルブド自身や上述のイエンの小説、その他の作家の短編などでも強制婚の問題は取り上げられてきた。こうした作品では、女性たちは強制婚だけでなく多様な性差別、女性であるために受ける屈辱に直面していることが描かれている。文学はここでも、女子の就学を妨げる意識や、慣習に対する人々の態度を表現している。

ブルキナファソでは、教育課程を上がるほどに女子の在籍数の割合が下がっていく。学校現場の状況とは具体的にどのようなものなのだろうか。今回は前期・後期中等教育を見

学した。

①ディシンのリセ訪問（写真３枚目：教室の写真）

今回私は、2005 年以来文通を続けてきた、フランス語と文学のリセ教員イスフー・ソレ（Issoufou SORE）氏の好意で、ブルキナファソのリセを訪問することができた。　ブルキナファソには 13 の地域圏があり、各地域圏はさらに１つあるいは複数の地方からなり、現在合計 43 地方を数える。また各地方はさらにいくつかの県から構成されている。そして各地方の中心都市と各県に１校のリセが設置されている。ソレ氏が勤務するのは、ワガドゥグから西へ 300 キロメートルの南西地域圏イオバ地方ディシン県のディシンという都市にあるリセである。

このリセの 2007-2008 年度の在籍数は 808 人（男子 586 人、女子 242 人）。前期中等課程の在籍は男子 478 人、女子 216 人である。後期中等課程の在籍は男子 88 人、女子 26 人である。今年度の前期中等課程（第六学級）への入学申請者は約 500 人だったが、２回の選抜試験によって 250 人に絞ったという。教室や教員の不足がその理由である。教師は前期、後期中等課程の授業を担当し、合計 10 名である。年間授業料は前期中等課程 12500CFA、後期中等課程が 2400CFA である。教科書は年間１冊 500CFA で貸し出される。破損した教科書は毎年国家によって補充されるという。またリセには「民主人民学校（école démocratique et populaire）」という制度があり、成績不振で退学させられた生徒を受け入れ、学習の継続を手助けしている。ディシンのリセの場合、水曜日の午後がこうした生徒の授業に充てられている。なお退学の基準を示すと、１学年の成績が 20 点満点中６点以下の生徒は即座に退学させられる。また２学年連続で７～９点だった生徒も退学である。

教師たちは生徒たちの抱える具体的な困難も話してくれた。農村出身の生徒たちは通学が不可能なので、ディシンで下宿をしながら共同生活を送っている。町に電気はあるが、電気代を支払う余裕がないので、夜遅くまで明るいバーの傍などで勉強するという。また貧しさのために一日中食事をとらずに授業を受ける生徒たちもいる。ディシンでも女子の在籍数は男子の約半分にしかならないのだが、ある教師は、リセまで進学できた女子は強制婚をなんとか免れてきた子どもたちなのだと語った。

私が見学した、ソレ氏による第二学級の文学の授業では、今年度はヴォルテールの『カンディード』を取り上げていた。生徒たちは教材を買う経済的余裕がないので、授業では作品の抜粋を教師がタイプ打ちし、コピーして使っていた。授業ではテクスト分析、教師

による歴史、文化、思想上の背景の説明が行われ、取り上げた箇所の主題に関する教師のまとめを生徒が書き取っていた。生徒たちはそれぞれの母語をもつのだが、学校ではこうしてフランスの古典を題材とし、フランス語だけで行われる授業を受けるのである。もちろんアフリカ文学もこれから扱うということだが、フランス語圏のアフリカの学校では、母語とは無関係な言語で、出自社会とはほぼ無関係な価値体系を学んでいくのである。

学校教育とフランス語は植民地化の遺産である。しかしアフリカもグローバリゼーションの波にさらされ、経済構造の転換による移民や頭脳流出が問題になっている。このためアフリカの子どもたちも生きる手段として学校教育を受け、フランス語を学ばなければならない現実がある。同時に、表現への欲求をみなぎらせている多くの作家たちの存在からわかるように、フランス語と本は今日アフリカ人が生き残りと再生、連帯のための思想を深め、それを伝播するための手段でもある。少しずつだが出版の可能性が広がっているブルキナファソの作家たちが、彼らを取り巻く社会をどのように捉え、生活の微細な層をどのような言葉として書き残し、それによってどのような変化を引き起こそうとしているのだろうか。これからの文学作品の解読と調査によってさらに明らかにしていきたい。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

ラルマッタン　ブルキナファソ支店（写真１枚目：土壁の L'Harmattan）

路上書店（写真２枚目：トタンでできた路上書店と店主）

ディシンのリセ（写真３枚目：教室）

イニャス・イエン氏の著書

すべてブルキナファソで出版されたもので、他の国では入手が困難